

温泉コラム

● 第 9 回 ●

「道北編」

医療法人福寿会 日野病院薬剤部

河野文昭

(温泉ソムリエ・温泉保養士・温泉入浴指導員)

1. 地熱の低い道北の温泉

地熱という点で見れば、道北は温泉不毛の地と言えるエリアかもしれません。しかし平成期に行われたいくつかの法改正に伴い、源泉温度が低くとも有効な成分が一定量含まれていれば、それは温泉であり、かつ療養泉を名乗る事が許されるようになりました。また、当時から急速な高齢化に対応する為、健康増進を目的とした温泉保養施設の設立に関して、国や自治体からも積極的に公費も投じられるようになりました。そうした流れもあって、平成の30年間で道北には結構な数の温泉が誕生する事となりました。元々道北の温泉といえば、十勝岳、旭岳、大雪山等の地熱を有した山々に由来する十勝岳温泉や吹上温泉、白金温泉、そして層雲峡温泉辺りが北限として知られていまし

たが、こうした新興の温泉の誕生により、道北は温泉地としてかなり面白い地域へと変化してきたように思います。今回はそんな道北の、新旧含めた低温温泉を中心に紹介していこうかと思えます。

2. 旭川市で入る本格的な温泉・龍乃湯温泉

道北の大都市として有名な旭川市ですが、惜しい所は気軽に行ける温泉地が無いという点かもしれません。札幌で云う所の定山溪温泉、函館には湯の川温泉があり、帯広にも十勝川温泉があります。距離は少しありますが、釧路では阿寒湖温泉がこれに該当するのかもしれませんが。そういった点では旭川も少し足を延ばせば旭岳温泉や層雲峡温泉といった本格的な温泉があるにはあるのですが、夏場はともかく、冬はかなり厳しい自然環境に晒される事もあって、決して気軽に行けるような雰囲気ではなくなってしまいます。そこで、普段使いで入れる本格的な温泉が市内にあればいいなあと思う訳ですが、実はJR東旭川駅の近くにそんなニーズを満たす温泉が一つだけ存在します。

その温泉の名は「龍乃湯温泉」といい、古くから銭湯と小規模の格安ビジネスホテルを運営する激シブの大衆温泉浴場です。源泉温度は13℃と非常に冷たく、成分総計479mg/kgの単純鉄泉という珍しい泉質です。28.9mg/kgの鉄(II)イオンは療養泉の基準(20mg/kg)を満たし、Fe(II)-HCO₃型の炭酸鉄泉のようです。炭酸鉄泉といっても、炭酸イオンの含量は僅か181.4mg/kgしか含まれておらず、温泉の有効成分としては鉄(II)イオンの存



参考資料①：龍乃湯温泉の高温浴槽。とても熱いが、水風呂は優しい温度。

在が突出した温泉となっています。見た目も“THE酸化鉄”といった感じの茶褐色をしており、その色の濃さは浴槽の底が見えない程です。この見た目から、いかにも成分が濃く、湯あたりしそうな印象を受けますが、前述の通り鉄分以外の成分が殆ど含まれておらず、見た目ほど身体への負担が大きい温泉ではない可能性もあります。そもそも鉄泉は濃い塩分を含んだ場合が多いので、塩類鉄泉と単純鉄泉の温熱効果を評価・比較する点では、貴重なサンプルではないかと思われれます。ただ、この龍乃湯温泉では高温浴槽で45℃近くまで加温しており、中温浴槽でも札幌市民にはやや熱めに感じる温度設定かもしれません。(特に早朝が熱い。)

特に低温の著しい、旭川らしい温泉銭湯といえるかもしれませんね。

3. 資源に乏しいが、稀有な炭酸泉を有する 協和温泉

旭川市の郊外にある愛別町は「なめこ」や「舞茸」など、多種多様なキノコ栽培に力を入れている自治体であり、町内にある協和温泉は地元産のキノコのフルコースが食べられる温泉旅館として、旅行誌などでも紹介されています。

この温泉は道内でも特に稀有な泉質で、成分総計2634mg/kgの内、遊離炭酸ガスが驚異の1713mg/kgと、突出した濃度を誇る単純二酸化炭素泉です。湧出温度は12.6℃しかなく、言わば天然の炭酸湧水のような温泉です。炭酸泉にも様々なものがあ

りますが、多くは炭酸水素ナトリウム(重曹)が主たる成分である場合が多く、協和温泉のように炭酸ガスが炭酸水素イオンを上回っている温泉はかなり珍しいパターンです。炭酸水素イオン656.9mg/kgと、炭酸ガスの1713mg/kgを併せると成分総計のうち約9割以上が炭酸関連の成分で占められ、無機塩類の割合の少ない純粋な炭酸泉である事がわかります。微かに溶存する鉄分や複数のミネラルイオンが呈する濁りと、それらが湯気となって香る独特の金気臭は、同じ炭酸系温泉である上ノ国の湯ノ岱温泉やニセコの黄金温泉にも共通しており、加温されても肌にはしっかりと泡付きがあります。

ただ、この温泉は湧出量が非常に少なく、源泉浴槽は浴場に一ヶ所ほど(他は通常の白湯)で、しかも一人用サイズです。源泉は浴槽に掛け流しされていますが、チョロチョロと極めて少量ずつでしか供給されていない上に、42℃程度までガッツリと加温されてしまっています。この点について宿のご主人に話を伺うと、源泉は宿から少し離れた山中に自然湧出するもので、供給量に関してはどうしようもない問題なのだそうです。炭酸ガス成分は加温すると飛んでしまう事から、その点についても話を伺ったが、温泉が冷たい(ぬるい)とお客さんからクレームが出てしまう事から、やむなく加温提供という形になっているそうである。言われてみれば、温泉に入る時に成分について云々思案を巡らすのは私の様な温泉マニア位で、一般のお客さんはそんな事気にもしないのが普通なのですから、せっかく入りに来た温泉がぬるかった



参考資料②：協和温泉のキノコのフルコース。これはこれで非常に魅力的だ。

ら、確かに苦情が出るかもしれません。仮に源泉を水風呂として提供したとしても、最近ではサウナブースもあって水風呂は競争率も高いですから、協和温泉のように湧出量の少ない温泉の場合、お客さん同士のトラブルを誘発しかねないような気もします。そういう意味では、今の提供スタイルは正解といえば正解なのかもしれません。

お客さん同士のトラブルで思い出しましたが、温泉を利用する上で利用客のマナー向上は、業界全体が取り組むべき永遠の啓蒙テーマかもしれません。特に炭酸泉は攪拌したり加温をすると、血管拡張作用を有する炭酸ガスがあつという間に飛んで行ってしまいますので、浴槽内ではなるべく体動を減らし、静かに湯を楽しむといったマナーがとても重要になってきます。しかし最近では浴場施設の新設・改装に伴い、エンターテイメント感覚で温泉を利用するお客さんも増えました。湯に入る前には必ず身体を洗い、タオルや長い髪の毛は浴槽に漬けないようにし、サウナの後は必ずシャワー等で汗を流して、水風呂は譲り合って利用する…公共浴場に行く際は、こうしたマナーを守って気持ちよく利用したいものです。私自身が遭遇したケースとしては、浴槽内で歯を磨いたり、髭を剃ったり、タバコを吸うといった事例が実際にありました。全国各地の公衆浴場組合等では「浴育」という言葉で啓蒙されていますが、こういっ

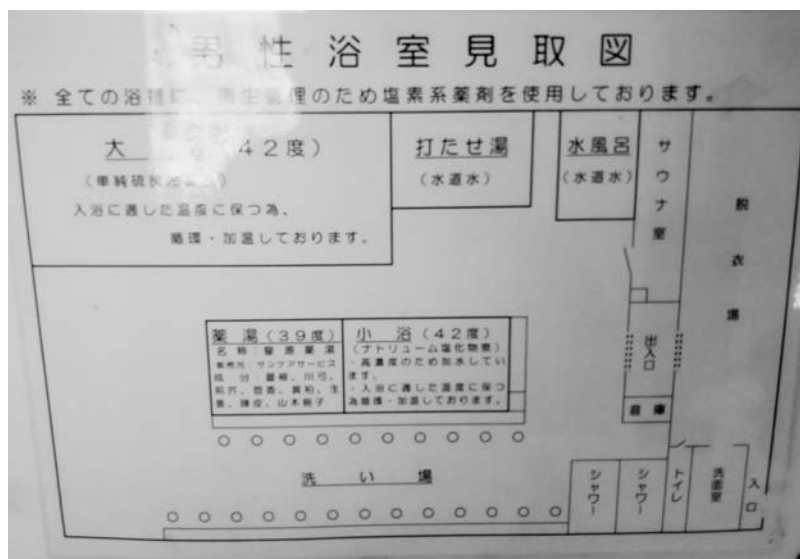
たマナー違反をする人の多くは割と自宅のお風呂感覚で公衆浴場に来ている方も多いため、風呂であっても公衆の場であるという教育は、小さい内から積極的に行っていく必要があるのかもしれない。

話が逸れましたが、源泉の細い温泉は資源を大切にし、皆で譲り合って利用するようにしましょう。

4. 道北の入口・留萌の神居岩温泉

本州からのツーリング客やキャンパーに人気の留萌から北の日本海沿岸沿いには、各町にそれぞれ魅力的な温泉があり、宿泊・観光地として利用されています。

道北の玄関口ともいえる留萌では、神居岩温泉ホテルにて二種類の泉質の湯を楽しむ事が出来ます。神居岩温泉の源泉自体は三つ(硫黄泉、単純泉、塩類泉が各1本)あり、それぞれ個性的な泉質となっています。源泉温度は硫黄泉と塩類泉で約10℃前後ですが、単純泉だけが46℃の高温泉となっています。実際の浴場ではこれらを混合し、加温で適温にしてから給湯しているようです。一つ目の硫黄泉は成分総計228mg/kgの単純硫黄泉で、イオン型の硫化水素(HS⁻)が2.6mg/kg、ガス型の



参考資料③：神居岩温泉の浴槽見取り図。
3つの源泉に加えて薬湯もあり、様々な泉質の湯が楽しめるようになっている。

硫化水素(H₂S)が0.7mg/kg程含まれています。単純泉にも微かに硫化水素を含み、こちらは成分総計249mg/kg中にHS⁻が1.5mg/kg、H₂Sは0.1mg/kg程含まれています。イオン型の硫化水素を含む事から、硫黄泉を使った浴槽は鮮やかな緑色を呈しており、若干のとろみもあるのか泡立ちも確認されました。恐らく、泉質の近い高温の単純泉はこちらに混合されているものと思われます。

もう一つの塩類泉ですが、成分総計23810mg/kgの含ヨウ素・ナトリウム/塩化物泉となっており、他二つの源泉とは傾向の異なる強塩化物泉です。成分構成としては殆どが食塩(塩化ナトリウム)で、陽イオンとしてはカルシウムイオンも1054mg/kg程含まれていました。硫黄泉とは浴槽が分けており、鉄(II)イオンも10.3mg/kg程度含まれているため、色も茶色く濁りが見受けられました。こちらはぬるめのジャグジーとして提供されており、成分が高濃度との理由で多少の加水がありますが、そもそもの塩分濃度がかなり濃い部類に入るため、舐めてみればハッキリと判るほどの塩味があり、浴後には心地よい火照りと発汗が続くなど、確かな温熱効果を発揮していました。

神居和温泉は留萌の繁華街からは少し離れた場所にある温泉ではありますが、3つの源泉に加えて独自処方の薬湯も提供されているので、個人的にはかなり面白い温泉という印象です。泉質やお湯の効能にこだわりたい人向けの温泉といえるかもしれませんね。

5. オロロンライン沿いの個性的な温泉達

オロロンライン沿いにはいくつかの温泉施設があり、道の駅とも併設されているので、馴染みのある方も多いのではないかと思います。留萌から北には苦前温泉、羽幌温泉、初山別温泉、遠別旭温泉、天塩温泉、豊富温泉、そして稚内市周辺にいくつかの温泉が掘削されており、北を目指す旅を彩る貴重な観光資源となっています。ちなみに留萌の南には増毛町の岩尾温泉があり、沿岸道路を整備する工事業者の人々の身体を癒す貴重な保養施設となっています。

これらオロロンライン沿いの温泉はどれも個

性的で、南から順に紹介していくと、まず苦前温泉は成分総計約27400mg/kgのナトリウム/塩化物泉、源泉温度46.4℃、色はやや暗めの茶褐色で、泥炭の様な匂いがあります。

そのすぐ北にある羽幌温泉は成分総計14410mg/kgの含ヨウ素・ナトリウム/塩化物泉、源泉温度31.6℃で、色は濁りのある褐色。苦前温泉と同じく海水と泥炭の混じったような香りがあります。

さらに北にある初山別温泉では、成分総計14770mg/kgの含ヨウ素・ナトリウム/塩化物泉が湧出し、こちらは温度面ではやや下がって21.4℃ですが、色は前二つの温泉とは打って変わって透明度のある鮮やかな緑色を呈し、泥炭の香りに混じって油のような匂いがあります。

初山別温泉から北東やや内陸部にある遠別旭温泉では、二つの源泉が湧出しており、片方が成分総計17620mg/kgのナトリウム/塩化物泉で、もう片方は成分総計3309mg/kgのナトリウム/炭酸水素・塩化物泉となっている。いずれも源泉温度は10~12℃と初山別温泉よりも更に低くなっているが、成分的には引き続き高濃度の塩分に加えて腐植質も含んでおり、前者が鉄分由来の赤茶色、後者はコーヒーのような黒色を呈するなど色彩に富んだ温泉となっている。

留萌から北上するにつれて徐々に地熱が減って源泉温度は下がっていく傾向が見られますが、遠別旭温泉の先にある天塩温泉では成分総計32570mg/kgで源泉温度30.8℃のナトリウム/塩化物泉が湧いており、天塩温泉の更に北にある豊富温泉も源泉温度は35℃と若干の上昇傾向が見受けられるようになります。温度としてはいずれも加温が必要な低温泉に部類されるものが多いですが、どれも成分面で非常に個性的な性質を有した温泉となっています。

遠別旭温泉のモール泉を除けば、成分総計で10000mg/kgを超える高張性温泉が揃っており、強力な温熱効果を有した強塩化物泉という点で共通しています。このような「強い湯」は身体への負担も大きく、入浴に際しては事前の水分補給を行うなど、ある程度事前に体調を意識しておく必要があります。実際に私が入浴していた際にも、お風呂上りの高齢者が脱衣所で脳虚血を起こして倒れ

5 試料1kg中の成分 : 分量及び組成									
(イ) 陽イオン				(ロ) 陰イオン					
		ミリグラム (mg)	ミリバル (mval)	ミリバル % (mval%)			ミリグラム (mg)	ミリバル (mval)	ミリバル % (mval%)
水素イオン	H ⁺				ふっ化物イオン	F ⁻			
ナトリウムイオン	Na ⁺	11260.	489.8	91.79	塩化物イオン	Cl ⁻	16970.	478.7	87.11
カリウムイオン	K ⁺	503.5	12.88	2.41	水酸化物イオン	OH ⁻			
アンモニウムイオン	NH ₄ ⁺	349.6	19.38	3.63	硫化水素イオン	HS ⁻	0.0	0.00	0.00
マグネシウムイオン	Mg ²⁺	87.6	7.21	1.35	チオ硫酸イオン	S ₂ O ₃ ²⁻	0.4	0.00	0.00
カルシウムイオン	Ca ²⁺	86.7	4.33	0.81	硫酸イオン	SO ₄ ²⁻	0.0	0.00	0.00
アルミニウムイオン	Al ³⁺				炭酸水素イオン	HCO ₃ ⁻	3812.	62.47	11.37
マンガンイオン	Mn ²⁺				炭酸イオン	CO ₃ ²⁻	5.8	0.19	0.03
鉄(II)イオン	Fe ²⁺	1.5	0.05	0.01	りん酸イオン	HPO ₄ ²⁻	7.7	0.16	0.03
鉄(III)イオン	Fe ³⁺				臭化物イオン	Br ⁻	197.7	7.42	1.35
					よう化物イオン	I ⁻	76.2	0.60	0.11
計		12290.	533.6	100.	計		21070.	549.5	100.
(ハ) 遊離成分									
非解離成分		ミリグラム (mg)	ミリモル (mmol)	非解離成分		ミリグラム (mg)	ミリモル (mmol)		
メタけい酸	H ₂ SiO ₃	129.1	1.65						
メタほう酸	HBO ₂	89.3	2.04						
計		218.4	3.69						
溶存物質(ガス性のものを除く)				33.58	g/kg				
溶存ガス成分		ミリグラム (mg)	ミリモル (mmol)	腐植質:6.4mg/kg					
遊離二酸化炭素	CO ₂	379.2	8.62						
遊離硫化水素	H ₂ S	0.0	0.00						
計		379.2	8.62						
成分総計				33.96	g/kg				
(ニ) その他の微量成分		マンガン:0.03mg/kg、亜鉛:0.02mg/kg、カドミウム:0.0004mg/kg、総ひ素:0.002mg/kg 銅:検出せず、鉛:検出せず、総水銀:検出せず、アルミニウム:検出せず ふっ化物イオン:検出せず							
6 泉 質 : 含よ素-ナトリウム-塩化物強塩温泉(高張性中性低温泉)									

参考資料④：天塩温泉の成分総計33960mg/kgは海水濃度(約3%)相当の濃さがある。

るといったアクシデントが発生しており、これらの温泉に共通する「強塩化物泉」という泉質は、特に注意が必要なカテゴリだという事がわかります。また「強い湯」には独特の「香り」も付き物で、このエリアの温泉は匂いバリエーションも多岐に渡ります。多くは泥炭質を含んだ土の香りのする温泉ですが、中でも初山別温泉(石油臭)や天塩温泉(アンモニア臭)、豊富温泉(石油臭)といった温泉では、稀に浴場の「香り」に充てられる(頭痛や不快感)人もおり、こうした点でも道北日本海沿岸沿いのエリアは、特に個性の強い温泉が多いと言えるでしょう。

ここまでリスク面の目立つ内容を書いてしまいましたが、「強い湯」はそれだけ温泉としての効能も高いので、毎日利用していれば必ずお湯負けしにくい、強く健康的な身体を作り上げる事が出来る筈です。独特の「香り」もまた、それ自体が温泉の成分を含んだミストであり、咽頭部などで粘膜に付着し、免疫応答を刺激するといった作用も期

待されています。

6. 試される日本最北の温泉

北海道最北の地である稚内市は、利尻島、礼文島、そして宗谷岬を目指す多くの観光客を受け入れる必要がある事から、多数のビジネスホテルや旅館が点在しています。シーズンオフの冬は閑古鳥かと思いきや、意外にも初日の出を宗谷岬で迎えようとする人は多く、なんやかんやで年末年始もビジネスホテルはそれなりに埋まっている事が多いようです。

元々稚内市周辺には温泉らしい温泉は無かった筈ですが、近年では市街地から見てノシャップ岬の反対側に市営の健康増進センター童夢という施設が建てられており、ここが日本最北端の温泉施設(源泉名・稚内ノシャップ温泉)となっているようです。ビジネスホテルにとって温泉は集客に関する大きなアドバンテージであり、独自に源泉を

掘削した施設もありますが、市内のビジネスホテルではこの稚内ノシャップ温泉のお湯を供給してもらい、大浴場に循環供給して付加価値をつけているようです。ちなみにこの稚内ノシャップ温泉の成分総計は公式HPによると6020mg/kgで温度38.4℃となっていました。これは実際の浴槽に流入される加水・加温後の数値らしく、私の泊まった市内のビジネスホテルでは成分総計24390mg/kg、温度は32.6℃という表示になっており、恐らくこれが本来の源泉スペックかと思われます。やはりかなり濃い目の強塩化物泉ですね。ホテルによって加水割合なども異なるようなので、そういう意味では同じ源泉でも童夢とは違った浴感に仕上がっている可能性があります。

この他、稚内市の港地区には稚内天然温泉港の湯という商業施設と併設された大型の温泉施設があったのですが、なんと2020年に閉館してしまいました。この港の湯には温度にして16℃前後の冷たい源泉が2つほどあり、混合泉としての提供だったのですが、腐植質を含んだ暗褐色の湯で、重曹成分も多くツルツルとした肌触りがあり、温泉としてのポテンシャルは決して低くはありませんでした。設備もまだ新しく快適な浴場だっただけに、閉館してしまったのは実に残念でなりません。

場所も広い駐車場のある海沿い好立地でしたので、稚内市の経済は本当に大丈夫なのか、正直ちょっと心配になる事態です。飲食業や観光業での不調が続く中、稚内市に限らず道北の温泉は皆、存続

が危ぶまれる時代に突入してしまっているのかもしれない。

7. 最後に

今回、記事を書く上での調べ物をする中で、稚内天然温泉港の湯が閉館してしまったという情報は、私自身少なからずショックを受けました。閉館したのは2020年の3月末だという事で、ちょうど札幌で新型コロナウイルスが流行し始めた時期と重なります。実際は直接新型コロナウイルスとは関係のない事案なのかもしれませんが、世界的な株価低迷は第一波の直前から起こっていましたので、インバウンド需要の低下から将来的な利益が期待できなくなった…というのは少なからずあるのかもしれない。実は今回のこの記事以外にも、札幌ではいつの間にか緑の湯や里塚温泉が閉館していたり、当別でも「ふくろふの湯」が閉館してしまうなど、ちよくちよく消えてしまった温泉はありました。一度廃業してしまった温泉はその後二度と入れなくなる事も多く、特に今回紹介した道北エリアは尖った泉質も多く、いずれも他に類の少ない貴重な温泉ばかりです。しかし移動の自粛が叫ばれる今、いつでも入れると思っていたら、気付けばもう入れなくなってしまっていた…という事態は、今後もっと増えてくるのかもしれない。

皆さんも、悔いのない温泉ライフを。

▶ 道薬メールニュースへのご登録のお願い ◀

全道の会員の皆様にいち早く最新情報をお届けする《道薬メールニュース》は、令和元年12月より、使用サイトを変更しており、既にご登録された皆様へは、再登録のお願いをお送りしておりますが、12月中に再登録のご連絡がなかった方については、ご登録メンバーから外れておりますのでご注意ください。道薬HPの更新情報をはじめ、災害時・緊急時のお知らせまで、会員の皆様に役立つ情報を配信してまいりますので、ぜひご登録されますようお願いいたします。

ご登録方法 ……………

北海道薬剤師会 HP 会員専用エリア

↓

北海道薬剤師会メールニュース登録

↓

* メールで返信

お名前、配信希望アドレス、
勤務先名、会員番号を本文に記入。